

能登の被災地を訪ねて

―傷付いた社会インフラ・風車、回復進まぬ現状―

一般社団法人 洸楓座 代表理事 佐藤建吉

▼元日の地震

今年1月1日、16時10分、松戸市の熊野神社に初詣の列に並んでいた。突然、足元がぐらぐら揺れた。能登半島地震であった。その地から、直線で300キロは離れているが、長く揺れ大地震であると感じた。参拝を終えTVを観ると、能登では津波警報とともに高いところへの避難を呼び掛けていた。

▼4カ月後の現場

能登には志賀原発がある。稼働はしてなかったが、東日本大震災での福島原発の最悪のメルトダウンを想い起すと、やはり気になった。冷却水の溢水や変圧機のトラブルが、その後報道された。元日の夜は、誰もが予想していなかった地震被害のTVを観て一夜を過ごした。

大晦日の夕方、輪島のG



能登半島の七尾市・穴水町を、千葉県から訪ねた。のと鉄道応援酒「鐵の道」のプロジェクトの打合せが目的であった。

4月30日の夕方、穴水町の能登ワイン株式会社を訪ねた。翌5月1日は穴水高校の校長と教頭を表敬訪問。「鐵の道」ラベルのその文字を、穴水高校の書道ガールズに揮毫して頂いたからである。午後、のと鉄道本社と駅舎にある道の駅を訪問し、目的の打合せをおこなった。また、輪島のG氏も穴水駅まで来てくれ、件のビジネスの打ち合わせもできた。

現地の七尾市から穴水町までの県道は、上り下りとも交通量が多く、大型トラックのほか、マイクローバスや乗用車もひっきりなしに走っている。復興は徐々に進んでいるが、4カ月経過した現在でも傾いた家や崩壊した家が至るところに見られる。道路も、割れ目をふさいだパッチ状態のところがあり、さらに段差があると、クルマはバウンドする。

能登には、行程も分らないのでホテルを予約せずに出掛けた。ビジネスホテルには空きがなく、その他のホテルは高額のあった。地元のG氏の情報で能登島に民宿があるかもとのこと。3軒目に電話した民宿が、地震で被災し風呂も食事も提供しない素泊まりで、業者だけは泊めているが、同条件でなければと、私たちが特別に泊めてくれた。

▼のと鉄道応援酒「鐵の道」

のと鉄道本社も被災し、本社業務は駅の隣地のプレハブ建屋で行っていた。同鉄道は4月6日に全線開通をしたが、現状では震災前の6割程度の運転本数である。震災から復興する同鉄道や沿線地域を応援するのが、

▼能登の宿泊が困難

宿泊などについても少し説明すれば、宿泊したのは能登島の民宿で、多くは被害で休業中であ



割れ目の入った道路

った。宿泊できた民宿は、能登島の一帯にあり堅牢な建物で、被害は見かけ上では受けてはいなかった。が、隣地の家屋の屋根はブルーシートで覆われており、倉庫の柱は傾いていた。客にありがたいたのは、いわゆるスーパースタンドの「ほつ」とらんどNANA O」で、大勢の利用客がいた。この施設は、温泉のほか食事と娯楽、スポーツジムもあり、被災地で唯一、日常を取り戻せる場所といえる。七尾市内の中心からクルマで数十分のところにある。

▼風力発電所の被害

能登半島の風力発電所が被害を受けたとの情報を得て、七尾市の虫ヶ峰風力発電所の現場に出かけた。スマホを観ながら、震度の大きい地点で、さらに進むと、翼がなくタワーだけの風車もあった。傍らにはナセルやノースコーンがあった。その後、インターネットで見ると地震の被害の結果のようである。他のウィンドファームでも地震により翼が折れた事例があった。その地は、七尾より北側であり、震度の大きい地点であることになったといえる。

▼能登の復興と課題

能登の復興は、7、8年は要するだろうというのが、地元の大半の方々の意見である。今回の地震は、震度7、マグニチュード7・8の大地震であった。港湾施設の隆起も顕著であった。能登半島は、地震が繰り返し発生する危険地帯であり、原発の被害もあった。ソーラー発電所も風力発電所も損傷を受けた。幸いだったのは、もともと大きく揺れた珠洲市に原発が建設されていなかったことである。志賀原発は、避難退路の面でも再稼働を許してはならない。世代間倫理についての認識を、また問われることになったといえる。